

ケン 俺のボネウイユでさ。あれをひっぱりだしてきて、ネクタイを締めて、セーターを上に着て、そろすれば身きれいにみえるかい。(1.0) その時には、なにからなにまでおんなじ色で、おんなじ年代のおんなじ車の男が、九九パーセント俺にびったしとつけてくるぜ。(1.0) マフラーをブンブンいわせてさ。(1.0) そいつはうすよじれたTシャツを着てさ、そろすりやおれがかまる前に、きたないTシャツの男が先にかまるのさ。

(2.0)

() くく

ケン たーただ／＼あー

アル (でも) ポンテイヤック・ステーションワゴンにのってつかまるやつはそらいないぜ。

つとも重要な問題にまだまったくふれていない。これからその問題を考えてみたいと思う。これから述べる分析は、強すぎる主張となり、今の時点では立証できないかもしれない。だが、私が述べることは、とても複雑で検討するに値する重要な問題であるので、あえてその考察に取り組みたいと思う。

22

なぜ若者たちは車の分類学（タイポロジー）を作るのに精をだすのだろうか。この問いを解くことでなんとか手がかりをつかむことがまずできる。若者たちの車の分類学は、見事に精緻なものだ。彼らはそうした分類学を用いて他のドライバーの良し悪しを判断しているのである。ただ彼らはいつも正しい評価を下すわけではない。さて、ここで問題となるのは、なぜ若者たちは、こんなことをするのかということである。彼らが自分たちで車の分類をするに先だっていったい世間一般で用いられている用語では不足なのだろうか。もしそれで不足だというなら、どこに問題があるのか。これが問題なのである。

まずこの問題に取り組むには、「ティーンエイジャー」というカテゴリと「ホットロッダー」というカテゴリの間にどんな相違があるかを見ていく方法がある。私はこの二つがまったく異なったカテゴリであると論じたい。すなわち「ホットロッダー」とは、あるきわだった理由で非常に革命的なカテゴリなのである。したがって、私はそれがどのように、またどんな意味で革命的なのか、このホットロッダーというカテゴリやそれと似た他のカテゴリについて、とりあえずざっと述べていきたいと思う。

この問題は、実際、非常に根が深いものである。まず専門家の間では有名な大変昔の例を取り上げ

より。そこで、このカテゴリについてある種の示唆を与えたいと思う。たぶんあなたがたはその例のことは知らないだろう。だが知っていたとしても、ともかくここでその例をあげることは教育上、何らかの価値があるだろう。『創世記』第十四章から引用してみよう。「逃げのびた者がヘブライ人マレムの大木の所に住んでいた。マレムはエシホルおよびアネルの兄弟で、これらの人々はアブラハムと契約を結んでいた」。さて、聖書の原典研究の歴史のなかで、この短い部分は最も有名なところである。この部分の何が最も根本的に重要なのか、次のように要約することができよう。「ヘブライ人アブラハム」という句は聖書において明らかに変な感じがする。というのは、それは一人のイスラエル人が外部の者に対して話しかけているわけではないのに、ヘブライ人として語られているまさにただ一箇所の場所だからである。これがなぜ重要かといえば、聖書研究者たちが聖書資料のその部分は、ユダヤ人によつて書かれたのではなく、したがってアブラハムの史実性について確かな（外部の）情報を伝えるものであると考えているからである。

さて「ヘブライ人」というカテゴリは、かなり根本的なカテゴリである。その性格はどういうものか。それはそのカテゴリに属さない非メンバーによつて用いられ、そのカテゴリに属するメンバーには、非メンバーに対して自分たちを同定するとき以外は用いられないというものである。

ちよつと話は横道にそれるが、人類学者たちが語っている部族名のうちの相当数のものが、こうした性格をもっているが、これはいわば人類学の一種の悪癖である。すなわち人類学者が書き記している部族の名前は、実際その部族のメンバーにはなじみのないものであり、そう名づけられた部族以外

23

の言語において、それが「よその」とか「異邦人」といったことを意味することが頻繁にある。それはなぜだろうか。誰かがある部族について他の部族のメンバーから話を聞くと、他の部族がその部族を呼ぶときの名前が得られる場合が多いからである。エリザベス・コルソンは、『マツカインディアン』というきわめて優れた民族誌のなかで、そのような命名の由来をたどっている。彼女は次のように述べている。「彼らはマツカという名前を一八五五年に合衆国政府と協約を結んだとき受け取った。政府側の通訳はクララム族であった。そして彼が、クララム族の言葉でフラハートイ岬の人々を意味する名前をその協約の締結者たちに与えたのである。この名前がそれ以来ずっと彼らに対する公式名称となった。今日では大部分の人たちが自分たちのことをマツカ族と呼んでいる。しかし年長いた者のうちのある者たちは、その名前は自分たちのものではないし、意味が理解できないと言って嫌っている」。これは、七六頁からの引用である。また、ラドクリフブラウンの『アンダマン島民』の一二頁を見れば、同じような言及を発見できるだろう。これは非常に頻繁におこることなのである。

さて前置きとして言えることは、ある集団にあてはめるカテゴリーを、当該集団以外の集団が所有しているということである。古代近東における「ヘブライ人」というような用語は、そうした類いのものであった。今日では「ニグロ」という用語がそうである。すなわち、ムスリム（イスラム教に改宗した戦闘的黒人集団）は、「ニグロ」という言葉が使われる場合、それを、自分たちの集団以外の人間が使っていることがわかる用語として扱おうとしている。おおざっぱに言って、支配的なカテゴリー

は、基本的に、人々が現実をどのように理解するのかを規定している。そして、人々の現実の見方を変革しようとするれば、明らかにそれは一つの革命なのである。思いつきでこうしたことを言っているわけではない。私は、こうした観点から、「ティーンエイジャー」と「ホットロッダー」の間の相違について見ていきたい。

一週間ほど前に、私は精神分析はブルジョアの学問であるという主張について触れた。そして、この主張の意味を理解するためのいくつかの見方を紹介した。その主張の意味を明確にするには、ほかに、精神分析の関心はおとなの現実規定のやり方を弁護することだ、という言い方がある。こうした弁護が誰に対してなされるのかと言えば、まず最初に、「ノイローゼ患者」と呼ばれる人々に対してである。メニンジャーは絶妙な言い回しをしている。彼は、ノイローゼ患者のことを「現実には忠実でない人々」と呼ぶ。精神分析家の観点からすれば、ノイローゼ患者とは一見おとなとして通用する子どもなのである（思うに、精神分析家の観点からすれば、精神病者は現実からおりた子どもでもある）。ここで重要なのは「ノイローゼ患者」とか「精神病者」とか、さらには「子ども」というようなカテゴリーに属する側で発せられた、自分たちは現実にかかわっているという主張を認めまいとすることである。

ちなみに私たちは、精神分析が恐るべき歴史の改訂に加担してきたことに気づいている。その最も際だったものは、エディプス・コンプレックスである。人々は、エディプス・コンプレックスについて口を開けば、きまつて、フロイトがエディプス劇について語っていることがまったく自明なことで

あるかのように語る。けれども、もしフロイト流の見方にとらわれずにその劇を読んだなら、明らかにそれがフロイトが提案しているのと正反対のものであることがわかる。エディプス劇はどうみても子殺しについての話であり、父親殺しの話ではない。そしておとながおとなのために書いたこの劇のなかで、父親殺しのテーマは、どちらかと言えば、子殺しの制度に対する合理化になっているのである。結局、エディプスはその誕生に先立つ予言によって捨てられる宿命にあった（そしてどちらかといえば、そのことには罪悪感が残ったかもしれないと想定することもできよう）。さらに、幼児であるエディプスを殺そうとした者たちは自分たちが何をしているのかを知っているのに対して（すなわち彼らは子どもを殺すおとななのである）、エディプスは自分の父親を殺す時、自分は何をしているのかわからない（すなわち彼は自分が一人のおとなを殺したおとなだということは知っているが、自分が父親を殺した息子だということは知らないのである）。

もちろん、おとなたちが子どもたちのことで折り合いをつけねばならない真の問題が存在する。こうした問題の大部分はまったく知られていない。だが、それはすばらしく興味深い問題である。たとえば、完全に文句のつけようがない子ども文化というものが存在する。すなわち子ども文化独自の創造物や歌やゲームなどをもち、信じがたいほど安定した文化が存在する。だから、たとえばピーター・オビとイオナ・オビ（オビ夫妻）による『学童たちの言い伝えと言語』という本を見れば、四〇〇年前前のロンドンの学童たちによって唄われていた唄が、いまだに唄われていることがよくわかる。その唄は純粹に子どもたちの口から口へと伝えられ、公的な保護も一切なしに、また、唄の文句は現代

英語から消え去ってしまっただけなのに、子どもたちによって唄いつがれてきたのである。同様のことは、子ども文化と結びついた他の一連の現象に関しても言える。

したがって、どのようにして子ども文化が伝達されるのか、また、それはどのような意味をもつかということ、非常に興味深い。こうした問題を考察することで、たとえば子どもとおとなの関係が新たに考えなおされるのではないだろうか。つまり、おとなは子どもを大きくしたものだとか子どもの改訂版だと言うかわりに、おとなを子ども文化の卒業生とみなすのである。

もちろん、安定し独立した子ども文化という概念とは対照的に、子どもたちが依存という概念をもっていることは非常に重要である。もし子どもたちが、本当の意味では依存していないということを知ったならどうであろうか。たとえば、おとなは、子どもたちを教える規範を子どもではなくおとなに対して適用しており、しかもおとなは、自分が困惑したり制裁をうけたり刑務所に入れられたりしないために、子どもが何をしようと、そうしたことのすべてに責任を取らなければならないということを知ったなら（確かに、おとなたちは子どもたちとの関係を放棄できる。しかし現実におとなにそんなことができるはずがないだろう）、子どもたちはおとなが子どもに大きく依存していることに気づくようになるかもしれない。たとえば子どもたちが折につけおとなたちに少しでも愛憎を示さなければならないように、おとなは子どもたちがおとなに示す反応に依存しているのである。

さて、こうしたことの大部分は公には認識されていない。それはマルクス主義者が、私たちの文化は労働者に依存していることが認識されていないと述べるのと同様である。すなわち、このことは上

層にいる者たちによって認識されないだけでなく、下層にいる者にも認識されないのである。そしてこうした場合に革命を起こそうとすれば、物事がどのように見えるかを組み換えようとするればよい。それは、一つには、あるカテゴリーによって自分たち自身の見方を確立し、他者に対してそのカテゴリーを通して自分たちを見るようにしむけることである。つまり、他でもない、そのカテゴリーが管理する見方を他者に強制することである。「ティーンエイジャー」というカテゴリーと「ホットロッダー」というカテゴリーの大きな違いは、「ティーンエイジャー」はおとなが管理するカテゴリーであるということである。「ティーンエイジャー」について知られていることは、おとなによって押しつけられたものなのである。そしてもちろん、白人に対する黒人の関係においてもパラレルな状況が存在する。

私が言いたいのは、自立性という概念は現在の押しつけられた自立性の概念に対抗するものとして主張できるということである。たとえば黒人や子どもに対していただかれている自立性の概念は、明らかに非社会的である。彼らは、かっこつきの「子ども」や「黒人」として、常に自立しなければならない。つまり、支配的な文化によって定義された仕方に従うことによるのみ自立するのである。良い子になりなさい、子どもじみたことをするな、身ぎれいにしなさい、よい仕事につきなさい。あなたにはそれができる。それはあなたの問題だ。自立性につきまとうこうした表現は、明らかに、おとなが押しつけたものである。これに対して、自立性を自分たちで管理する方法は発見できるのだろうか。ときに人々は、単純でしかもありふれた解決方法を提出する。しかし私たちが扱っているもの

は、そうした類いのものではない。たとえば、黒人たちが州を買い取る企ては、そうした類いのことである。そこでは成功するのに何が役立つのかを彼らが明らかにするだろう。

目下の議論のなかで、決定的に重要でありまた必要とされることは、誰であれ（ニグロやティーンエイジャーといった）カテゴリーで括られるものをそのままにする場合、その人が何を見ているのかに変化をもたらすことができるかどうかである。もしそうした変化をもたらすことができれば、黒人や若者たちを見たとき、彼らが「ニグロ」や「ティーンエイジャー」とはこんなものだと思っている知識をコントロールすることができよう。もちろん、どのようにしたらコントロールできるのかは、きわめて複雑で困難な問題である。若者たちは、車に乗れば、自分たちが十代のドライバー（ティーンエイジ・ドライバー）として見られることを知っている。私は、以前こうした現象について話したことがあるが、若者をつねに「ティーンエイジャー」として見られるのではなく、もつと他のカテゴリーでも見られるのだ。では、どのような条件のもとで「ティーンエイジャー」というカテゴリーが唯一のものとして選ばれるのだろうか。車を運転している誰かが「ティーンエイジャー」として見られるならば、その車に乗っている車中は、ティーンエイジャーとして見られるだろう。さて若者たちは、そのように見られることを回避したり変更を加えたりするのに、どんなことができるだろうか。おもいだして欲しいのだが、ここで求められているのは、メンバーによってメンバーがもっている、あるカテゴリーをめぐる知識体系をひとそろえ全部修正することなのだ。つまり何を言っているかという

んなことが必要なのかを識別するのは、ほかならぬ彼ら（一緒に乗っている若者たち）だということである。すなわち、サンクションを与えることができるのは彼らだということである。

30

さて、そこでのサンクションとはどのような性格をもつのだろうか。もちろん、みんなによつて違ってある者に私刑を加える必要はまったくない。そんなやり方ではなくても、どのようにしてサンクションが与えられるかは、ある意味で、まったく想像もおよばないものである。スポーツカーのドライバーたちは、互いにすれちがうとき、ヘッドライトを点滅させるということは、以前よく見られたし、恐らく今でもあるだろう。さて今フォルクスワーゲンのドライバーが、スポーツカーのドライバーに向けてヘッドライトを点滅し、完璧に無視されたとしてみよう。まず言えることは、たとえばスポーツカーのドライバーがそれに答えてライトを点滅しかえしたからといって、誰かがそのスポーツカーに爆弾を仕掛けるなんていうことはありえない（だが、彼は自分の責務をはたしていないのである）。つまり、彼の責務とは、メンバーにふさわしくない者がたとえどのようにライトを点滅させてくるとしても、絶対に無視して他のすべてのスポーツカードライバーを守ってやることである。そして「スポーツカードライバー」というカテゴリーのメンバーたちは、こうした彼らの責務をはたしてきたのである。

このことは、往來で行なりドラッグレースとも大いに関係がある。つまりこうだ。冒頭にあげておいた短い会話のなかでは、ある男がボネヴィル（言いかえれば、ポンティアック・ステーションワゴンのこと）に乗って停車し、レースに挑もうとしている。もう一人の男も同様で、彼らは、まさにド

ラッグレースをしようとしている。こうしたことは、あの会話を読めば、すぐにも想像できるだろう。だが、もしホットロッドの文化がきちんとはたらいっているとしたら、ボネヴィルのドライバーが誰かほかの者にレースを挑んだとしても、ホットロッドダーたちは、そいつとはドラッグレースをしようとはしないだろう。彼らは、たとえそいつの車がどんなに速くとも、またほかにどんな理由があろうとも、彼と一緒にレースをするのにふさわしい奴とは認めないだろう。つまり彼の車は、ドラッグレースをするための車ではないのだ。ティーンエイジャーも含めて、誰もが自動車の町デトロイトで作られた車を買ひ、それを運転している。だから、私が自分の車に根本的な改造を加え、それに対して「ホットロッド」という称号を与えるとしよう（もちろん、こうした場合に限られることはない。というのも、ある会社には特注のホットロッド仕立ての車もあるのだが）、とすればそうした改造車を誰が運転しているかなんて、誰も考えないのだ。誰だって、それがホットロッドであり、ホットロッドダーが運転しているのだとわかるのである。そしてホットロッドダーたちは、自分の車で何をやるのかどんな格好をしているのか、またどんな行動をするのかなど、ホットロッドダーとはこんなものだと知られていることを、彼らは互いに相手に強制することができ、メンバーでない者から、そうしたことを守ることができるのである。

自己執行（self-enforcement）の問題にとって、決定的に重要なことがある。ホットロッドには、若者や「現実には忠実でない」おとなしか乗らない。だから、もしあなたがホットロッドを手に入るとすれば、最も重要なことは、それで曲乗りをやることだ。そして、あなたがホットロッドダーになれる

31

かどうかは、他のメンバーが喜んでそれを認めるかどうかにかかっている。たとえば、あなたが、まあまあ奴なのか、最高の奴なのか、どうしようもない奴なのかは、彼らが決めるのだ。つまり、問題なのは、あなたがいったんホットロッダの候補者になったら、他のメンバーたちが保持し、執行するコントロールに自ら従うということなのである。そして、そこにあるのは、ただ速く走る喜びだけなのだという考え方や、そうした考え方からでてくるある種の結論がどうしようもないのは（たとえば、この考え方は、若者たちにドラッグレースのできる安全な場所を用意しようという理由の一つになっているかもしれない）、この考え方がホットロッダ自身の現象とはまったくべつな現象を管理しようとしているからだ。

このように考えていくと、若者たちが普通の車を運転している同輩の若者に対してもサンクションを与えることに関心をもっていることがわかってくる。なぜなら普通の車を運転している若者は、「ティーンエイジャー」のカテゴリー（それについて知られていることをすべて含めて）に、依然としてあてはまるからである。このカテゴリーの決定的な特徴は、それがおとなに対して忠実な、おとなが管理するカテゴリーだということである。さらに、普通の車を運転する若者は、ある精神医学的なカテゴリーがそれに対応するはずの者、つまり「裏切り者」になる可能性がある。ここで言う「裏切り者」とは、下位カテゴリーに属する忠実でないメンバーをさす。私たちは、ふつう「裏切り者」にあたるような精神医学的なカテゴリーをもっていない（私は、なぜ「スト破り」や「裏切り者」にあたるような精神医学的なカテゴリーが存在しないのかわからない。これは興味深い問題だろう。冒頭

の会話を見ればすぐわかるように、若者の一人は、身だしなみをきちんとして清潔な格好で外へ出れば、たとえ車をとばしても、おまわりは絶対に自分を捕まえることはないと言っている。もちろん彼は、ドラッグレースをしない善良なティーンエイジャーを襲うことができるし、一方でドラッグレースをやれば、おまわりなんか捕まるようなへまは絶対にしないと言っているのだ。すなわち、彼は本当はホットロッダたちに忠実なのだけれども、おとなたちに忠実のようにみせることができる、と言っているのである。もちろん、彼の連れは、そんなことはただ口先だけの話であり、彼がやっていることは、ホットロッダたちへの裏切りだと受けとめているのである。

さて、以上述べてきたことが現実の世界ではどうなっているのか、それを十分に理解するためには次のことに注意しなければならない。まず第一に私たちが扱っているのは、集団ではなくカテゴリーであることだ。（女性、老人、黒人、ユダヤ人、ティーンエイジャー等々の）カテゴリーの大部分は、普通、集団という場合のどの意味をとつても集団とはいえない。けれども、どのカテゴリーについても私たちは豊富な知識をもっている。どのメンバーもこうしたカテゴリーのどれかを代表するものとして見られ、あるカテゴリーにあてはまる人は誰でもそのカテゴリーの一人のメンバーと見なされる。そして、そのカテゴリーについて知られていることはまた、彼らについて知られていることなのである。ということは、一人の人の運命というのは（そのカテゴリーのメンバーである）他の人々の運命に結びつけられており、その結果、内部でもメンバーによって執行されている当のカテゴリーを中心とした社会統制のシステムが規則的につくり出されていくのである。というのも、もしある一人のメ

ンバーが白人女性を強姦したり詐欺をしたり街頭でレースをしたり等々のことをしたなら、そうした出来事はこれこれの名前の人がしたのではなく、ある(その人に対して)適用可能なカテゴリのメンバーがしたのだと見られるからである。そして、当の個人以外のカテゴリのメンバーも同じ償いをするしなければならない。こうしたさまざまなカテゴリは、概してこの問題をひきうけており、どおりわけかメンバーは彼らを拘束している文化がもたらすイメージをそのまま行動に移そうとするのである。

こうした社会統制のシステムは、どの政府によっても執行されていないし、それを執行する役所も存在しない。また、大部分のメンバーは互いに面識すらないのだ。だが、彼らは、翌日の新聞に、彼らのうちの誰かが何かをしたという知らせが載るのをずっと気にとめながら、生活し、そして死んでいくのである。たとえば、大統領が暗殺され誰が犯人なのか(単に誰がやったかという名前だけではなく、彼がどのカテゴリのメンバーか)ということがわかるまでの期間、この国のすべての抑圧された集団は、自分たちがそれをやったのではないかとすることを死ぬほど恐れながらじっとしていたことだろう。そして、もし彼らがそれをやったなら、そのことは彼らの生活のなかの事実になるだろう。そうして、せいぜい彼らは、自分たちの(カテゴリの)なかにもいいやつもいれば、悪いやつもいると言うことができるだけである。

このような状況を何度も打ち壊そうとしてきたのは、ティーンエイジャーたちだと思ふ。ホットロッドからサーフアト、ビートニックやその他いろいろなものに至るまで、彼らは、誰もが自分たち

の言葉を曲げることなく、そのとおりに認めなければならないような独立した集団を最終的に打ち立てることにかかわってきた。そしてこの点で、彼らと麻薬常用者とのつながりを特に見て取ることができよう。彼らは実際、自分たちがどのように現実を理解しようと、それに介入するな、自分たちは自分たちの現実をつくるのだ、と言っているのである。もちろん、若者たちの場合には、彼らが企てようとしている革命は、あまりに大きな問題を抱えている。というのは、彼らは信じられないくらい割合でメンバーを失っているからである。しかし別の革命をすれば、彼らがメンバーを保持できる限りでは、もつと成功のチャンスがあるかもしれない。

ともかく、ここではつきりさせておきたいのは次のことだ。つまりたとえば、私たちは雪に対するカテゴリを一つしかもたないのに、エスキモーはそれを十七もの異なったカテゴリとしてもっているから、エスキモーは私たちよりも雪に関心があるということにはまったくならない。あるいはまた、若者たちが車について五十七ものカテゴリをもっているのは他の集団に比べて彼らのはるかに車に関心があるからだということにもまったくならないということだ。むしろ、若者たちがそのようなカテゴリをもち、こうしたカテゴリに焦点を合わせているという事実は、ある安定的な文化に対して多かれ少なかれ根本的な攻撃がなされていることを示す。その文化は世界をあるがままのものとして見るすべての人々に準拠する限りにおいて安定的なのである。つまり人々は文化によって与えられたカテゴリに従って世界を見る限り、そう見ることがここちよいかどうか、あるいは彼らが上流階層であるか下層であるかはまったく関係がないのである。しかも人々は誰もそれをどうにかでき

るなどとは夢想だにしない。

こう考えていくと、社会変動の最も重要な問題の解決には、カテゴリの集合(セット)の配置、それらの使われ方、カテゴリ構成要素(メンバー)についての知識、カテゴリ適用規則の変化や、カテゴリ属性の変化、これらすべての説明が不可欠だろうと思われる。

36

原 注

(1) 会話の筆字記号について、(1.0)は沈黙(ボース)を示し、数字は秒数である。／は他の発話者による割り込みの点を示す。

(2) 次にあげるのは、この会話と似通った特徴をもつストーリーである。これは、その場に居合わせたほかの二人の少年がいないときに、同じ少年の語ったものである。ここや、おそらくは別の場所でも、述べられている活動は、「マッシング」として記述できる類いの活動である。つまりそれは真切りやスト破りの行為に似ている。この例で主張されているのは、こうである。彼は、本当はぶつうのドライバーとは違い、ホットロッドに近いカテゴリ、つまりサーフアードに対して忠実なのに、ぶつうのごくありふれた車の格好をし、ぶつうのドライバーを羨んでいるんだ、と(ゲイル・ジェフアソン記)。

ケン あー、あー、ちょっと待てよ。俺のプリマスのギアの後ろの恐じゅうにいつぱい、サーフステッカーが

貼ってあったのを知ってるかい。

ルイース ふーん。

ケン それでさ、あそこではサーフィンが嫌われてるんだよ。サーフィンなんてどうしようもないしろものだ、というわけさ。

ルイース ええ、知ってるわ。

ケン 最悪だよ。おとなはまゆにしわを寄せるし、子どもはいやがるというわけだ。あいつらがおれを見つけたら、よく石を投げてきたもんだよ。

ルイース えーっ。

ケン それでさ。

ケン 石をかわして歩いたんだ。だからとうとうこう決めたんだ。こんなめにあつちやたまらないから、かみそりの刃でうしろのサーフステッカーを全部はがしたんだ。そうしたら、まるでどこにもあるぶつうのギアにみえるようになってしまった。今度はまちを乗り回しても、だれも右どころか何も投げてきはしない。実際とても気持ちがいいんだ。